

## 〈論文〉

## 国民作家の創造

## —ルルフォと1950年代批評—

仁 平 ふくみ

はじめに

メキシコの作家ファン・ルルフォ (Juan Rulfo, 1917-1986)<sup>1)</sup>にまつわる伝説的なエピソードは少なくない。『燃える平原』(*El llano en llamas*, 1953) と『ペドロ・パラモ』(*Pedro Páramo*, 1955) の二作しか小説を残さなかったこと、*La cordillera* (『山脈』) という次回作を準備していると言い続けながらとうとう発表せぬままに亡くなったことなどが、様々な憶測を呼ぶからだろう。そして、当然のことながら、ルルフォの地位の確立には『ペドロ・パラモ』という小説の評価が深く関わっている。ルルフォ財団が決定版とする Cátedra 版『ペドロ・パラモ』の序文は、発表直後には価値が決定していなかったものの、その評価は年を追うごとに高まり、60年代末のラテンアメリカ文学のブームの時代に地位が確定したとする [González Boixo : 12]。しかし、これも『ペドロ・パラモ』を「早すぎた傑作」として伝説化するものであると言えよう。たしかにルルフォの評価が決定したのはブームの時代かもしれないが、実は発表直後からルルフォの作品は、メキシコでは大きな注目を集めていたのである。

本論は『ペドロ・パラモ』を契機として、若手作家であったルルフォがメキシコの古典的作家とみなされてゆく過程を検証するものである。本論の前提には、メキシコ文学とはなにか、どのようにあるべきかをめぐっ

て、メキシコ的なもの (lo mexicano) と普遍的なもの (lo universal) という二つの軸にもとづき、メキシコ知識人が19世紀から繰り返してきた論争がある [Schneider, Sheridan など]。

この対立関係に、ルルフォをめぐる言説もまた無縁ではない。その論争が一旦の終決をみるものとして『ペドロ・パラモ』は解釈された側面があるからである。ルルフォへの批評・評価の過程の再考は、ルルフォをメキシコ国家・メキシコ性と結びつけた枠組みの中で正典化することへの問い直しを含んでいる。テキストそのものの読解に立ち返るための前提として、ルルフォという作家がいかに偶像化されたのかを確認しておきたい。

ルルフォに関する批評を収集・研究するセペダは、ルルフォにまつわる言説には偏った集合記憶があり、未だに価値づけの流れは明確になっていないと指摘する [Zepeda 2008 : 186]。ルルフォについての批評を対象とした研究は、ほとんどなされておらず、先行研究は、『ペドロ・パラモ』直後の文学界における反応を網羅的に紹介したセペダのものがあるのみである。この研究においてセペダは、ルルフォ作品が「伝統を重んじるメキシコ文学と、言語的に洗練されたコスモポリタン文学との統合であった」 [Zepeda 2005 : 12, 274-275] として文学史的重要性を確認しているが、統合であるとされるに至った経緯を分析してはいない。

ルルフォ作品の正典化、作家の偶像化には、ルルフォが雑誌に短編を発表した1940年代から1950年代初頭、『燃える平原』の発表時、『ペドロ・パラモ』の発表時、その後から現代に至るまで等、複数の段階がある。翻訳の出版、ルルフォ自身の言や伝記的要素も関係しているだろう。

本論では、『ペドロ・パラモ』を対立する二つの文学の流れのジレンマとする言説が、いつごろからいかにして出現したのかを、「メキシコ性」というキーワードを中心に考察する。主に扱うのは『ペドロ・パラモ』発表前後の1950年代の新聞・雑誌批評である。この時代には、新聞批評が作者と読者を接続し、読みの方向性を定める重要な役割を果たしていたとビタルは定義する [Vital 2005 : xvi]。当時の批評を検討することで、批評

家・作家たちが形成しようとした『ペドロ・パラモ』像、ルルフォ像を探る。

第一節では、『ペドロ・パラモ』発表直後の批評を取り上げ、好意的・批判的反応のそれぞれの理由を検討する。第二節では、主にアメリカ合衆国への当時のメキシコ文壇の対抗意識、また外国の作家とルルフォを接続する際、「メキシコ性」が批評において重要な要素として浮上する過程を追う。そのような状況に加えて、作家個人を知って読むという当時の文壇の風潮を指摘し、それが作家の地位を脅かすために、あるいは安定させるために作用することを提示するのが第三節・第四節である。第三節では、主に批評家フランシスコ・センデハス (Francisco Zendejas)、第四節では作家ファン・ホセ・アレオラ (Juan José Arreola) の存在に注目し、ルルフォがメキシコにおいて、一定の方向性を持って読まれるようになった過程を論じる。

## I 「我々」を描いた作品

1955年3月末に Fondo de Cultura Económica 社から出版された『ペドロ・パラモ』は、文学界に少なからず論争を巻き起こしたようだ。出版直前の1955年3月15日には、出版社発行の定期刊行物 *Gaceta de Fondo de Cultura Económica* に新刊予告が登場する。その惹句は「我々の国 (nuestro país) のいくつかの地域社会における支配的状況、地方ボス体制を明らかにする」、「メキシコの独自性、特異性が、民衆の口語に近い説得力を持った言葉で語られる」というものである。この時点では『ペドロ・パラモ』は、メキシコの民衆の姿や社会的現実を描いたリアリズム小説の流れに連なるものであるというイメージを負っている。

しかし、本作は「リアリズム」という語では表現しきれない賞賛を受けることになる。初めて登場した批評は *México en la Cultura*<sup>2)</sup>1955年4月3日、「この幻想的な、またとても現実的な作品は多くを含んでいる」と述べるものである。これは好意的批評だと解釈できるだろう。すでに「幻想

的」と「現実的」という、対立する二つの概念を同時に孕む作品だと指摘されていることも注目に値する。一週間後の4月10日再び *México en la Cultura* に掲載された批評も好意的である。

発表直後から意見が分かれた。まず片方の極に、メキシコ文学の傑作だと示唆する、本屋というひそやかな声の批評家たちがおり、反対の極にはルルフォは繰り返しているだけだと声高に主張する、あまり有名でない作家たちがいる。

[*México en la Cultura*, 10 de abril de 1955]

公に発表された批評がほとんど存在しないこの時点で、すでに本作への反応がある程度みられたことが上記引用から理解できる。また、この作品に対する評価が分かれていることも推測される。この評者は意見を明示してはいないが、「声高に」、「あまり有名でない」といった皮肉を用いて、ルルフォを批判する作家らを揶揄している。さらに街の本屋が文学の理解者であり、その彼らがこの作品を認めているというレトリックを用いながら『ペドロ・パラモ』に好意的な立場を表明している。この論からは、市井の読者に愛され、評価される作品こそを、真に良いものとする思考方法を読み取ることが可能だろう。ハイソサエティを避け、公の場で発言することが少ない民衆の中へ降りていこうとする態度は、続く文章からも明らかである。この評者はマウリシオ・マグダレーノ (Mauricio Magdaleno) の *Ritual del año* (1955) が『ペドロ・パラモ』の理解を助けるとしながら以下のように続ける。

(*Ritual del año* によって喚起される精神状態が：筆者注) ルルフォの魔術的世界を旅するために、我々の現実 (una realidad nuestra) の神秘、我々の土地 (una tierra nuestra) の神秘、今までメキシコ作家に発見されず、亡霊として、さまよう魂としてルルフォが発見して

くれた人間の驚くべき神秘を共有するために、最もふさわしい精神状態であろう。 [México en la Cultura, 10 de abril de 1955]

このように『ペドロ・パラモ』はそれまで聞き取られてこなかった、書き取られてこなかった「我々」の民衆の声を読者に届けるものであると主張されている。ちなみに「lo nuestro」という語は、1940年代初頭にエルミロ・アブレウ・ゴメス (Ermilo Abreu Gómez) が新しいナショナリズムを求めてアルフォンソ・レイエス (Alfonso Reyes) に宛てた文章中で初めて「苦しむメキシコの民衆」という意味を含んで用いられたとビタルは理解している [Vital 1994: 202]。『ペドロ・パラモ』の批評においても強調されるのは新しい観点からの「我々」の姿の発見であり、秘められていた「我々の内奥」の発見である。

出版直後からすでに「我々」のものとしてルルフォ作品を読み解く態度の素地は出来ているように思われる。つまり、ルルフォ作品は初めから、メキシコ人らしさを確認するために「我々」を求める読者によって読まれたと言えるだろう。付け加えておこならば、この「我々」像は知識人によって求められ、共感されたものであった。セペダは、初版2000部に過ぎない『ペドロ・パラモ』の読者層は農民ではなく知識人であったと指摘する [Zepeda 2005: 50]。土地と密接に結びついていない人々が、土着的なイメージを持つ作品を評価したのである。族長の支配を受け、歴史の中で移ろいゆく、メキシコらしさが胚胎された場所としての農村を描いた作品として『ペドロ・パラモ』を理解すれば、この作品が「我々の」ものであると受け取られたことは不自然ではない。

しかし、「我々」を描いているだけでは、『ペドロ・パラモ』はここまで注目を浴びなかったはずである。断片によって成り立つ形式、意識の流れを連想させる『ペドロ・パラモ』の語りは、一元的な農民賛美や社会変革の必要性の訴えには陥らない、新しい文学作品であるとみなされたのである。1955年に発表された批評の多くが、農民やメキシコの現実を描いたも

のだとする観点から論じながらも、ルルフォの新しさをほのめかしている。「いままで知られているようなメキシコではない、メキシコの現実を描いている。衰弱し、硬直していたメキシコ文学界に新風を吹き込んだ」[de la Cruz 1955]、「幻想によって、隠されていた現実が露にされる」[Burns 1955] という発言がそれを示している。少なからぬ数の批評家が、それまでのメキシコ小説に行き詰まりを感じており、その突破口として『ペドロ・パラモ』を受け入れたのである。

すでに発表の同年には、ルルフォはメキシコ文学史上に名を残した作家たちと並べて論じられている。例えばカルロス・エリゾンド (Carlos Elizondo) は1955年7月に「1955年は、アルフォンソ・レイエスの作家活動50周年、そしてまた、『ペドロ・パラモ』出版によっても、メキシコ文学史に残る年になるだろう」[Elizondo 1955] と述べている。同年には、第二節で詳しく取り上げるカルロス・フエンテス (Carlos Fuentes) の批評も発表され、ルルフォは文学史上の作家と併置されている。発表直後から『ペドロ・パラモ』は、その後のメキシコ文学史を変えうる作品とみなされていたのである。

しかしその反面、批判もあった。ルルフォの友人である、詩人のアリ・チュマセロ (Alí Chumacero) のものは有名である。彼は言葉の簡潔さを賞賛しながらも「基盤としている構造に中心的な欠陥がある」、「幻想小説たろうとしているが、現実が終わらないうちに幻想が始まってしまう」[Chumacero 1955] としている。この批評は後に頻繁に参照され、チュマセロは傑作を理解しなかったとされることもあるが、内容や構造を具体的に批評したものは珍しく、「我々のメキシコ」を読もうという先入観なく、文学作品として対象を批評するチュマセロの誠実な態度をうかがうことができるだろう。

『ペドロ・パラモ』について、発表直後に不満をとらえた人々の主張は主に二種類ある。ひとつめは、69の断片によって成り立ち、時系列の把握が困難な構造への、チュマセロが抱いたような困惑である。時間が一方向

に進行する革命小説などの形式に慣れている読者には、前衛的な作風は批判の対象となった。

もうひとつは、「良い文学は教育的であるべきだが、『ペドロ・パラモ』にはメッセージや救いがない」というものであった [Anaya-Sarmiento 1955など]。メキシコの文化活動が政府の援助のもとで発展してきたことを考えると、小説に教育的意義や社会貢献を求めようとする態度は珍しいものではあるまい。ルルフォの作品は、このように主張を読み取ろうとする先入観によって読まれてもいた。それはメキシコ国内の「我々」を求めめる解釈によるだけではなく、外国の批評、および外国を意識することによって促進された一面がある。

## II 「メキシコ性」によって世界へ

外国でも『ペドロ・パラモ』の批評は発表の同年に登場した。出版から約四ヶ月後、1955年8月5日アメリカ合衆国 *Times Literary Supplement* に登場した批評は、約一ヶ月後の9月15日に *Gaceta de Fondo de Cultura Económica* にも掲載された。これによって、ルルフォがアメリカ合衆国でも取り上げられていることがメキシコで知られることとなった。この紹介記事は「社会的現実を前衛的手法で描いた作品」であるとしている。手法についてはさほど取り上げられておらず、書かれているメキシコの情景やあらすじに注目した内容となっている。

亡命スペイン人であるラモン・シラウ (Ramón Xirau) は、米国資本の団体 Centro Mexicano de Escritores が発行する英語の雑誌 *Recent Books in Mexico* の1955年5月15日号で次のように述べている。

メキシコ人は、死を遠く先のものだと認識しておらず、人生の中に、自分の人生に、いまここに、常に存在していると考えている。そのため、ルルフォの小説の中で死者が語る時、それは幻想としてではなく、誰しもが生と死の細いチョークの上を歩いていることを知ら

せていると受け取られるのだ。

[Xirau 1955]

ここで打ち出されているメキシコ理解は「メキシコ人=死と共生する人々」という現在まで死者の日などによって説明されるステレオタイプである。さまよう死者の魂が語る『ペドロ・パラモ』は、メキシコ人の心性を描いたものとして外国人にも受容しやすい要素を持っていた。基本的には、この刊行物は英語圏の人々へのメッセージであることに留意しなければならないものの、メキシコで発行され、多くの知識人が関わっていた以上、スペイン語で創作する若い作家たちが目を通していた可能性は大にあるだろう。外国からのまなざしによって、メキシコ側にも自分たちと死との関係が近いという認識が発生したのではないだろうか。シラウは1959年にふたたび、ルルフォがメキシコのアイデンティティと文化を表現していると紹介し、その際にもメキシコにおける生と死の概念について言及している [Xirau1959]。

外国、少なくとも比較的多くのルルフォについての情報があるアメリカ合衆国において、初期から『ペドロ・パラモ』はメキシコ人の心性を理解するために重要な作品として認知されていた。ロッドマンが、面会したフエンテスの発言を引用しつつ「『ペドロ・パラモ』は（中略）どのようにメキシコ人が話しているのかを本当に語ってくれる本だ。革命小説の「リアリズム」の上をゆく」[Rodman 1958]と『ペドロ・パラモ』を紹介したことは、この傾向をよく示す一例であろう。メキシコらしさを強調し、「本物の」メキシコの姿を求める風潮は、メキシコ国内ではなかったのである。

『ペドロ・パラモ』がメキシコ人の心性を代弁するという認識は批評界だけではなく、研究界においても共有されていた。60年代に入ると、アメリカ合衆国におけるラテンアメリカ文学研究の大家ブラッシュウッドが、「メキシコに、このように家父長制を表現したものはなかった」、「ルルフォは今まで提示されなかったメキシコの現実を描いた」[Brushwood :



33]と説いている。『ペドロ・パラモ』はメキシコの現実を新しく描いたと受け入れられたのだった。これは「我々」を求めた批評と同様、「メキシコ性」を主眼とした紹介である。

1960年代には、メキシコの新聞にブラッシュウッドへのインタビューが掲載されもしている [Entrevista por E. Carballo, *Cultura en México*, 1964]。メキシコ文化人がアメリカ合衆国からのメキシコ文学の定義を吸収し、自分たちが構築した文学作品の定義へと反射させ、受け入れていたことが確認される。

発表当時の状況に戻ろう。外交官の息子であった若きフエンテスが行った、ルルフォ紹介の影響も指摘しておかなくてはならない。1955年『ペドロ・パラモ』発表当時、フエンテスは、1954年短編集『仮面の日々』(*Los días enmascarados*)発表の後、初の長編小説となる『澄みわたる大地』(*La región más transparente*, 1958)を執筆中であった。また、すでに *Universidad de México* など雑誌の編集にも携わり、外国文学を積極的に紹介してもいた。彼は、1955年当時はメキシコにいたと思われるが、フランスの雑誌に『ペドロ・パラモ』についての紹介文を発表した<sup>3)</sup>。フエンテスは、マルティン・ルイス・グスマン (Martín Luis Guzmán) とマリアーノ・アスエラ (Mariano Azuela) 以来、メキシコ文学は自然主義的手法を乗り越えられなかったと述べたのち、すでにルルフォを彼らと並ぶ存在として扱っている。そして有名なメキシコの画家たちと、オクタビオ・パス (Octavio Paz) とルルフォとを重ね合わせながらこう論じる。

ルルフォは、偉大な現実のビジョンは厳密な複製の産物ではなく、想像力の産物であると理解している。絵画におけるオロスコやタマヨのように、詩におけるオクタビオ・パスのように、彼はメキシコの内なる風景の色調をみごとに混ぜ合わせてみせたのだ。 [Fuentes 1955]

フエンテスはルルフォがメキシコ人を描く新しい手法を身につけたと主

張する。そしてパスの名を出すことで、メキシコ人のアイデンティティを探究した『孤独の迷宮』(El laberinto de la soledad, 1950) とルルフォの作品とが関係づけられる。そして「メキシコの内なる風景」という表現が登場することで、『ペドロ・パラモ』には今まで明らかにされなかったメキシコが描かれているという思想が提示される。セペダは、「メキシコ性」という言葉の意味は、言語で表現することができない不合理なものであったため、ルルフォ作品はパスの『孤独の迷宮』を作品化したもの、あるいは「魔術的リアリズム」と解釈されたとしている [Zepeda 2005: 253] が、フエンテスのこの批評からもそのような思想の流れを明確に読み取ることができるだろう。『ペドロ・パラモ』と「メキシコ性」は幾重にも関係づけられ、切り離せないものとなってゆくのである。

このように、ほとんど無名である作家を外国へアピールするためには、小説の内容や主題が、受け入れる側の常識の範囲内でありながら、新しさをも感じさせる必要性が、つまりエキゾチシズムにうったえかける必要性があった。フランス語でフランス人にむけて発表された、自身も駆け出しの作家であったフエンテスの批評が、フランス・メキシコでどの程度受け入れられたかは明らかではない。このフランス語批評は1956年コロンビアの雑誌 *Mito* 上でスペイン語に翻訳、発表されている。のちにフエンテスが有名な作家になるに伴い、ルルフォの評価も国内・国外で共に上がっていったと推測するのはそれほど無理のあることではない。

これまで提示してきたような「内なるメキシコの顕現」の主張と同時に、フエンテスは『ペドロ・パラモ』の作者が普遍性を持つ作家であることを主張する批評にも関わっている。ルルフォの地位を固めるのに、大きな影響を及ぼしたのはカルロス・ブランコ・アギナガ (Carlos Blanco Aguinaga) の批評「ファン・ルルフォの現実と手法」であろう。この批評はフエンテスと批評家エマヌエル・カルバージョ (Emmanuel Carballo) によって創刊された *Revista Mexicana de Literatura* の創刊号に掲載された。フエンテスは、メキシコ国内でもルルフォの評価を高めようと

していたと言えるだろう。ここでブランコ・アギナガは、ドストエフスキー、D. H. ロレンス、ジョイス、ヘミングウェイなど世界の文学の潮流を中心として論を展開させ、その中にルルフォを位置づけている。彼は現代の文学は「客観的現実」と「主観的現実」を結びつけようとするものだと述べる。

ファン・ルルフォの苦悩に満ちた感受性によれば、ペドロ・パラモは、メキシコの生における外部の激しさと内部の緩慢さの間に発生する緊張関係の象徴である。 [Blanco Aguinaga 1955]

『ペドロ・パラモ』における主観的現実と客観的現実の関係性が苦悩により見出されたとするレトリック、そしてのちに登場する「メキシコ人が外に意識を向けたとき、それは暴力となって生きられる」という文脈からは、再び『孤独の迷宮』のこだまを聞き取ることができよう。それでいながらこの批評は、「客観」と「主観」という対立軸を効果的に用いて、ルルフォ作品を外国の作家と引き比べて論じようとしているのである。彼は「ルルフォの描いた短編や小説は、ルカーチが定義し、多くの作家が例を見せたような近代への不安にも合致する」として、多くの同時代の作家と関連づけることで、メキシコの独自性を強調するだけではない受容の例を提示している。そして宣言とも言えるような言葉を記す。

これらすべての（現代小説の：筆者注）流れの交叉点において、つまり普遍的で現代的な、それでいながら伝統的でメキシコ的な現実の独自性の中で生き、かつ創作する流れの中で、我々はファン・ルルフォに出会う。短編集『燃える平原』、そして小説『ペドロ・パラモ』によって、彼はメキシコ小説の新しい航路を開いたのだ。

[Blanco Aguinaga 1955]

メキシコの伝統を受け継ぎながらも、手法や、その底辺に流れるものは他国の作家と共通すると分析したことで、伝統と革新とが融合する解釈が誕生する。伝統的であることと、近代的で国際的であることが、統合されるのである。非常にバランスのとれたブランコ・アギナガの発言は、ルルフォ作品の権威づけに有力な後押しとなったと考えていいだろう。現在でもこの批評は、『ペドロ・パラモ』に関する代表的批評とされている。

さて、他にも検討しておかなくてはならない点がある。ブランコ・アギナガのように外国文学と比較してルルフォを評価した人々がいる反面、ナショナリストも同様に発言力を持っていたはずである。ビタルは『ペドロ・パラモ』の登場によって1932年のコスモポリタンとナショナリストの対立が再燃したとしている [Vital 2005: xx]。アメリカ合衆国の作家の影響、およびアバンギャルドの影響を彷彿とさせる作風は、保守的な批評家にとっては疎ましいものであったはずである。その攻撃の矛先は作品のみならず作家ルルフォに向けられたのであった。

### Ⅲ 個人攻撃と個人擁護

その一例が政府の出版局の編集者でもあるアルベルト・キロス・エルナンデス (Alberto Quiroz Hernández) が、当時編集長であった雑誌 *El libro y el pueblo* にペンネームで書いた記事である。彼はアグスティン・ヤニェス (Agustín Yáñez) やエフレン・エルナンデス (Efrén Hernández) に続く若手作家がルルフォやアレオラであることを嘆く。前の世代からのルルフォへの影響は現在では論じられているが、ここでキロス・エルナンデスは二つの世代に断絶をみている。

そして「ルルフォについて、いくつかの真実をお話しましょう」という前置きの後、ルルフォの人間性は劣っている、実はルルフォの短編は編集者たちに評価されていない、『ペドロ・パラモ』の出版は危ぶまれていた、ルルフォは故意に難解に書くことで名声を得たなどと中傷する。作品への攻撃と作家への攻撃は同時に行われている。そしてキロス・エルナン

デスは、

駆け出しの作家諸君には、偉大な作品は絶対に、模倣でも、発育不全でも、そして悪い法のもとで作り上げられたものでもあってはならないと肝に命じ、思い出してほしいものだ [Quiroz Hernández 1955]

と述べる。まず「模倣」と「発育不全」は、ルルフォの作品が外国の作家の手法を真似ており、断片によって構成される形式は不完全であると、キロス・エルナンデスが考えていることから導き出された表現であろう。

不可解な「悪い法」という婉曲的な表現は、ルルフォの当時の経済状況を暗示していると思われる。ルルフォは、先にも名を挙げた Centro Mexicano de Escritores という組織から奨学金を受給しながら『ペドロ・パラモ』を執筆した。この団体はアメリカ合衆国のロックフェラー財団を母体とし、マーガレット・シェド (Margaret Shedd) が館長となり、メキシコの有望な若手作家を育てる目的で開設された。のちに有名になったメキシコ作家の多くがこの団体と関わっている。ルルフォと親しかったチュマセロやアレオラ、そしてフェンテスもこの奨学金を受給している。

ここで攻撃の矛先は、ルルフォの実生活に向かっている。若い作家たちが、外貨の援助によって執筆することを批判するキロス・エルナンデスのような人々もいたのである。ロックフェラー財団が、メキシコの知性を腐敗させているとの批判を受けるメキシコでの状況が、アメリカ合衆国の新聞に報告されてもいる [Vázquez Amaral 1956]。メキシコで文化的ナショナリズムの風潮があったことは否定できないだろう。ルルフォへの反発は、作品自体に向けられていただけではなく、ルルフォ個人を知っている文壇人の、実生活や主義に基づいた、アメリカ合衆国への対抗意識でもあったと言えよう。

とはいえ、当時は作家の個人的な事情や状況を知りながら批評することは当然であった。ここに、ルルフォを強力に擁護する重要な人物がいた。

それが批評家フランシスコ・センデハスである。彼は当時 *México en la Cultura* に定期的に新刊紹介のコラムを持つなど、影響力のある批評家であったと言えよう。センデハスがルルフォを後押ししたことは現在では注目されておらず、批評家としての業績のまとまった資料などもない。しかし、センデハスはルルフォの作品のみならず、彼の作家としての価値を高めた。センデハスの作り出した言説、影響なくして、ルルフォは現在の地位にはいないと筆者は考えている。

そのひとつの証拠となるのが、センデハスの提案で1955年に創設されたハビエル・ビジャウルティア賞 (Premio Xavier Villaurrutia) である。第一回目、1955年の受賞者はルルフォなのである。つまり、この賞はルルフォに授与するために設立されたと解釈することもできる。実際に、当時、仲間がルルフォのために創設したとする批判的な見方もあった [Luquín 1957]。しかしその後、この賞は毎年優れた作家、例えばパス、エレナ・ガーロ (Elena Garro)、フエンテスなどに授与され続けることとなる。それによって、初代の受賞者であるルルフォ自身の価値や権威がさらに高まったと考えてもおかしくはない。

センデハスがルルフォについて書いた文章は多くはないが、彼のルルフォ擁護の弁が、現在メキシコで研究者がルルフォを評価する点とかなり一致していることに注目したい。現在の研究はセンデハスが作り出した言説から変化していないと考えることもできるだろう。

まず1955年4月24日 *México en la Cultura* 上に掲載された批評を見てみたい。センデハスは『ペドロ・パラモ』のような作品が待ち望まれていたと述べ、「メキシコの伝統の最奥からのテーマを、完全に今日的な、現代的な手法で描いた」とまとめる。センデハスはこの小説を初めての「メキシコの詩的な小説」としている。これは、革命小説のようなりアリズムの伝統と、言語的前衛を統合した作品だという意味だと解釈できる。先ほどのブランコ・アギナガと同様「メキシコのテーマ」を「前衛的手法で描いた」という論理展開である。

センデハスがブランコ・アギナガと大きく異なる点は、センデハスの方がより当時の文壇の反応を意識していたことにあるだろう。彼は文学史を把握しつつ、当時のメキシコ文壇が必要としていた、次の世代を担うパイオニアとしての役割をルルフォの中に見出していた。

1955年8月に、センデハスは更に文章を発表する。「メキシコ知識人への手紙：こんにちの国家的問題に対する知性の義務<sup>4)</sup>」という挑発的な、そして愛国主義的でもある題名は、知識人たちへの呼びかけである。おそらくこの批評が想定しているのは、ルルフォの小説を批判している、メキシコの伝統的小説を重んじている人々であろう。センデハスはルルフォの普遍性ではなく、反対にメキシコ人らしさと一人の生活人としてのひたむきさを強調する。

ルルフォはあなた方には良すぎる書き方をしているのです。(中略)  
(ルルフォはあなた方に向けて書いているのですがね。)

しかしあなた方は良いもの、真正なものを愛さないで、ルルフォをアレオラにけしかけ、アレオラにルルフォをけしかけているのです。彼らが忙しいことに気づいていないのですね。ルルフォはパパロアパン<sup>5)</sup>の広報係だし、家族を養わなくてはならない、生活しなくてはならないのです。アレオラは自分の出版社を持っているし、その上あなた方の編集もしている。それに加え、二人は執筆もしている。あなた方に読むものを与えてくれているのです。これ以上なにを求めるのですか？

[Zendejas 1955b]

センデハスにここまで激烈な文章を書かせるようななどのような批判があったのだろうか？ 同論説には「ルルフォは詩的な小説を創始した。英語圏の作家の真似とされているが、誰と似ているのか考えてみるといい」という一節があり、ルルフォが外国の優れた作家を手本とすることを肯定している。先にも示したキロス・エルナンデスのようなアメリカ合衆国へ

の対抗意識が、メキシコにおける初期のルルフォ批評に大きく影響していたことがうかがえる。

注目すべきは、ルルフォ擁護のレトリックである。センデハスは、ルルフォは「あなた方」に向け、「あなた方」のために書いているのだと述べる。つまりルルフォはメキシコ文化人のために書いているのであり、敵ではなく新しい仲間なのだと言っているのである。

さらにセンデハスは、ルルフォの作品を上位において絶対的なものとし、ルルフォが理解できないのはルルフォに責任があるのではなく、理解できない人物に問題があるのだという論理を展開する。この言い回しから、ルルフォ作品が権威づけられ、不動の価値を持つものとして聖化される萌芽をうかがうことができよう。

加えて、センデハスは一人の作家としてのルルフォ、家長として一生懸命に働くルルフォの様子を提示することで、ルルフォを批判する人間を責めるという戦略を用いている。作品の解釈や文学の在り方ではなく、作家の私生活を垣間見せることで、人間としての在り方を作品に関わる議論に巻き込もうとしているのだ。ここで提示される、労働しながら創作する作家像は「我々」民衆の姿を描いた作家にふさわしいイメージとなっていく。ルルフォ批判もルルフォ擁護も、まず作者ありきであり、その状況を巧みに利用し、センデハスはメキシコ人が読むべき古典作家像を創造したのである。

#### IV 比較対象となった一人の作家

作家本人が評価の対象となる当時の文壇において、ルルフォと比較された一人の作家がいたことが、先のセンデハスの批評からも理解される。それがルルフォと同郷のハリスコ州出身であり、ルルフォと同年代<sup>6)</sup>のアレオラである。バスケスは、ルルフォとアレオラについて、彼らは常に正反対の双子として注目されていながら、のちに不和が話題にされたとしている [Vázquez : 14] <sup>7)</sup>。このアレオラを比較対象の位置に据えることで、



ルルフォはより土着的な作家であるというイメージを得ることに成功したのではないだろうか。

アレオラは、メキシコで評価されている作家だが、ルルフォと比較すると世界的な知名度は低い。しかし、彼は1940年代後半から70年代の長きにわたりメキシコ文壇の中心を担っていた、再評価が望まれる作家である。彼はマルセル・シュオブなどヨーロッパの作家への傾倒や、ボルヘスとの交流が知られており、形而上学的なテーマを好み、研ぎすまされた文体を持っていた作家とされている。また、編集者としても手腕を発揮し、多くの若手作家を発掘した。フエンテスが出版した最初の短編集『仮面の日々』がアレオラの主導する出版社 Los Presentes から出ていることが代表的な例である。

ルルフォが作家として踏み出した第一歩にも、若いころから雑誌を主宰していたアレオラが関係している。ルルフォはメキシコ第二の都市、ハリスコ州州都グアダハラで1943年<sup>8)</sup>、同人誌 *Pan* を主宰していたアレオラと知り合った。その後メキシコシティで雑誌 *América* に再録されることとなり、さらには『燃える平原』に収録される短編は、それ以前に *Pan* に掲載されていた。アレオラの存在なくしてルルフォは作家とならなかったかもしれないのである。

同年代で同郷のこの二人の青年は、1950年代にはメキシコ文壇の中心にいた。ルルフォは『ペドロ・パラモ』発表以前は、『燃える平原』によって短編作家とみなされており、当時アレオラは既に二作の短編集を発表していたために、二人を短編作家として同時に紹介し、また比較した批評は多い。

さらなる彼らの境遇の類似点は、先に述べた Centro Mexicanos de Escritores で奨学金を受給していたことである。この団体の情報誌 *Recent Books in Mexico* においても、1955年から1957年頃にルルフォとアレオラは繰り返し紙面に登場し、二人がこの時期に有望視されていた中心的メンバーであったことが理解される。

*Recent Books in Mexico* 上で、彼らはほとんど常に比較されている。例えばアレオラの短編の紹介記事は、現在メキシコには二つの流れがあり、片方をアレオラが、もう片方をルルフォが率いているとして、ルルフォにも言及する [*Recent Books in Mexico*, Vol. II, Núm. 3]。同誌は1957年にも「メキシコの若手作家15人」という特集を組み、アレオラはメキシコ短編の新しい流れを創り、ルルフォは地域に根ざしてメキシコの貧困を描いていると定義し、対比している [*Recent Books in Mexico*, Vol. III, Núm. 3]。二人は当時、補完し合う存在とみなされていたのだろう。同雑誌の二ヶ月後の号も、再び二人に触れ「二人の作家と二つの作品がこの地の文学界を完全に占めており、それ以外の声を聞くのは難しい」 [*Recent Books in Mexico*, Vol. III, Núm. 4] としている。他の批評とも照らし合わせると、これをメキシコ文学を理解するための図式的な見方に過ぎないと決定することはできまい。

アレオラとルルフォを比較した最初の批評は1954年のエマヌエル・カルバージョの「アレオラとルルフォ」であろう [Carballo 1954]。ここで、カルバージョは二人が常に話題をさらい、論争を引き起こしていると報告している。そしてアレオラはユニバーサルで量産型であり、ルルフォは土着的でゆっくり書くと二人の特徴を分類している。

とはいえカルバージョはアレオラが書くものは「寓話」であり、教訓を持つという点においては、救いのない物語を書くルルフォよりも伝統的であるとしている。このように、二人の作家の態度を精査すれば、二人の関係を二項対立的構造に回収することができないのは明らかである。しかし、二人の対比は、その後も続いていく。この二人の作品によって、最先端のメキシコ文学の異なる二つの傾向が代表されているという考え方は主流であるように思われる。

アレオラという比較の軸があったことで、ルルフォは「土着」というナショナリストが好む色を身にまとい、批判を避けることができたのである。ルルフォは土着的な作家であり、アレオラは前衛的かつ普遍的であ

る、という色分けがなされ、それによってルルフォは、メキシコ人が読むべきものとしての国民作家の位置を定着させた<sup>9)</sup>。

詩人エドゥアルド・リサルデ (Eduardo Lizalde) もまた、1954年に、作家は文学的表現と社会問題のどちらを重要視して取り上げるべきかという論説の中で、まさにルルフォとアレオラとを対比させながら、アレオラは非現実的なものを題材として卓越した言語を用いて創作する知的な作家であり、それに対してルルフォは土着的であり、言語に気を配っておらず、地域的テーマに興味を持っていると論じる [Lizalde 1954]。

『ペドロ・パラモ』がまだ発表されていなかったこの時点で、批評のまとめとしてリサルデは「我々が求める完全で成熟した作家は、おそらくファン・ホセ・ルルフォとでも言うべき中間の作家であろう」と、二人の名前を合体させた架空の作家の名を提示し、二人の融合こそがメキシコ文学の完成形であると結論づける。1955年『ペドロ・パラモ』発表時の、リアリズムと幻想の融合という批評、ブランコ・アギナガの批評、センデハスの批評は、それぞれの立場は異なるものの、このファン・ホセ・ルルフォの誕生をほのめかそうとするものであったと解釈することができるだろう。

ルルフォはアレオラと比較され、常にその差異として土着的であることを強調された。アレオラという比較対象が存在したがゆえにルルフォは、「我々の」土地を描いた作家としての地位を確立することができた。そしてそれゆえにメキシコ的なものを求めるメキシコ文壇に、そして外国に、インパクトを与えることができたのである。

マーティンは、ブームの時代にルルフォの神話化が進んだとし、ルルフォはラテンアメリカ作家としての地位を築いたものの、世界文学になるには至らなかったと指摘している [Martin : 499]。この言に一抹の真実があるとして、それは、ルルフォが「メキシコの」であり「ラテンアメリカ的」であると解釈されたことが一因ではないだろうか。

## V 終わりに

本論では、主に『ペドロ・パラモ』発表時期前後の批評を検証しながら、ルルフォを、土着的なテーマを扱いつつも斬新な手法を用いて、「メキシコ文学」の金字塔を打ち立てた国民作家であるとする言説の生成過程を追った。「メキシコ性」を読解の基盤とするメキシコ知識人、世界文学として認めるブランコ・アギナガの主張、リアリズムと詩の融合を指摘しながら、メキシコ文壇内でのルルフォの価値を高めたセンデハス、比較対象となったアレオラの存在から検討した。『ペドロ・パラモ』の評価は、ルルフォ個人への批評、知識人たちの関係、外国への意識などが複雑に交錯して形成されてきたことを確認した。

「作者の死」がうたわれたポストモダン時代においても、メキシコでの解釈においてルルフォの言は特権的に扱われているようにも思われる。ルルフォ自身の言が、あるいはそれを取り巻く環境が、研究や読みの方向性を狭めているのではないかという可能性も含めて、今後考察していきたい。具体的な課題は、ルルフォ作品を取り巻く言説、文壇の『燃える平原』評価、ルルフォ自身の自己イメージ操作、ルルフォの後半生における絶筆状態、アレオラやフエンテスなど文壇人との関係の精査による新しいルルフォ像の提示である。

## 註

- 1) 情報の正確さを重視し、本論では出版社、雑誌、団体の名は原文で表記する。作家・批評家名は初出時のみカタカナと原文を同時に表記し、以下カタカナを用いる。また紙面の都合により、引用の原文は割愛し、すべて拙訳にかえた。
- 2) 当時もっとも信頼されていた [Zepeda 2005 : 87]。1949-1961. 日刊紙 *Novedades* の日曜文化特集紙。Fernando Benítez などが運営。
- 3) フランス語で発表しており、原文未入手。Joseph Sommers の西訳を使用。
- 4) 未入手。Zepeda 2005, pp. 115-116を参照した。
- 5) 政府機関 Comisión de Papaloapan。ベラクルス州、プエブラ州、オアハカ

州を流れるパパロアパン川流域の地形、住民、農業調査などを行っていた。ルルフォは『ペドロ・パラモ』発表直後にこの機関の一員としてこの地域に調査に出かけている。Millán Vargas 参照。

- 6) アレオラは1918年生まれ。ルルフォは1917年生と判明しているが、ルルフォ存命当時は1918年生まれ、つまりアレオラと同年生と認識されていた。
- 7) Vázquez や Olea Franco を先行研究とする、後年の二人の関係についてのルルフォとアレオラによるコメントについて、また『ペドロ・パラモ』執筆をアレオラが手伝った可能性についての考察は機会をあらためたい。
- 8) 1945年ともされる。ルルフォ、アレオラともにインタビューによって異なる年を述べている。ルルフォの短編が初めて *Pan* に掲載されたのは1945年。
- 9) ルルフォもアレオラと自身との差異を強調しようとしていた側面がある。1981年パリで行った講演で、ルルフォは自らとアレオラを対比させていると Jiménez de Báez は指摘している [Jiménez de Báez : 32]。ルルフォが、求められていた作家像を自ら演じていた可能性については、別の機会に述べたい。

## 参考文献

### 書籍

- Brushwood, John S. 1966. *Mexico in Its Novel: A Nation's Search for Identity*. Austin and London : University of Texas Press.
- García Gutiérrez, Georgina. 2008. "Lector de Juan Rulfo : Carlos Fuentes de líneas literarios, cadenas genésicas y lazos poéticos," en *Pedro Páramo : diálogos en contrapunto (1955-2005)*. (ed. Yvette Jiménez de Báez y Luz Elena Gutiérrez de Velasco.) México, D. F. : El Colegio de México y Fundación para las Letras Mexicanas. pp. 267-286.
- González Boixo, José Carlos. 2007. "Introducción," en *Pedro Páramo*. Madrid : Ediciones Cátedra. pp. 9-62.
- Jiménez de Báez, Yvette. 1994. *Juan Rulfo : del páramo a la esperanza. Una lectura crítica de su obra*. México, D.F. : Fondo de Cultura Económica.
- López Mena, Sergio. 1993. *Los caminos de la creación en Juan Rulfo*. México, D. F. : Universidad Nacional Autónoma de México.
- . 2004. "Prólogo," en *El llano en llamas*. México, D.F. : Random House Mondadori. pp. 7-20.
- Martin, Gerald. 1992. "Vista panorámica : la obra de Juan Rulfo en el tiempo y en el espacio," en *Toda la obra*. (Edición y crítica de Claude Fell.) México, D.

- F.: Consejo Nacional para la Cultura y las Artes. (Colección Archivos 17.) pp. 471-545.
- Millán Vargas, Paulina. 2010. "La difusión inicial de las fotografías de Juan Rulfo (1949-1964)," en *Nuevos indicios sobre Juan Rulfo: genealogía, estudios, testimonios*. (coordinador. Jorge Zepeda.) México, D.F.: Juan Pablos Editor. pp. 91-133.
- Olea Franco, Rafael. 2008. "Rulfo y Arreola (Otra vuelta de tuerca)," en *Pedro Páramo: diálogos en contrapunto (1955-2005)*. (ed. Yvette Jiménez de Báez y Luz Elena Gutiérrez de Velasco.) México, D.F.: El Colegio de México y Fundación para las Letras Mexicanas. pp. 241-265.
- del Paso, Fernando. 2003. *Memoria y olvido: vida de Juan José Arreola (1920-1947)*. México, D.F.: Fondo de Cultura Económica.
- Rodman, Selden. 1958. "The Intellectuals," *Mexican Journal: The Conquerors Conquered*. New York: Devin Adair. pp. 189-206.
- Ruffinelli, Jorge. 1992. "La leyenda de Rulfo: cómo se construye escritor desde el momento en que deja de serlo," en *Toda la obra*. (Edición y crítica de Claude Fell.) México, D.F.: Consejo Nacional para la Cultura y las Artes. (Colección Archivos 17.) pp. 447-470.
- Schneider, Luis Mario. 1986. *Ruptura y continuidad. La literatura mexicana en polémica*. México, D.F.: Fondo de Cultura Económica.
- Sheridan, Guillermo. 1999. *México en 1932: la polémica nacionalista*. México, D. F.: Fondo de Cultura Económica.
- Vázquez, Felipe. 2010. *Rulfo y Arreola. Desde los márgenes del texto*. México, D. F.: Universidad Autónoma de la Ciudad de México.
- Vital, Alberto. 1994. *El arriero en el Danubio*. México, D.F.: Universidad Nacional Autónoma de México.
- . 2005. "El arquetipo y los individuos," en *La recepción inicial de Pedro Páramo (1955-1963)*. México, D.F.: Editorial RM y Fundación Juan Rulfo. pp. xv-xvii.
- Zepeda, Jorge. 2005. *La recepción inicial de Pedro Páramo (1955-1963)*. México, D.F.: Editorial RM y Fundación Juan Rulfo.
- . 2008. "Algunos aspectos de la respuesta crítica inicial a la novela *Pedro Páramo*," en *Pedro Páramo: diálogos en contrapunto (1955-2005)*. (ed. Yvette Jiménez de Báez y Luz Elena Gutiérrez de Velasco.) México D.F.: El Colegio de México y Fundación para las Letras Mexicanas. pp. 185-198.

## 雑誌掲載批評

- Anaya-Sarmiento. 1955. "Pedro Páramo y Juan Rulfo: tres pequeñas entrevistas," *Revista Mexicana de Cultura*, 19 de junio.
- Anónimo. 1955. "La primera novela de Juan Rulfo," *Gaceta de Fondo de Cultura Económica*. Año II, Núm. 7, 15 de marzo.
- . 1955. "Juan Rulfo: Pedro Páramo," *México en la Cultura*, 3 de abril.
- . 1955. "Autores y libros," *México en la Cultura*, 10 de abril.
- . 1955. "La literatura en México," *Gaceta de Fondo de Cultura Económica*. Año II, Núm. 15, 15 de septiembre. (初出 "Prose and Poetry in Spanish America: The Move Away from European Style and Themes," *Times Literary Supplement*, 2788, August 5.)
- . 1956. "New Edition of Stories by Juan José Arreola," *Recent Books in Mexico*. Vol. II, Núm. 3.
- . 1957. "Fifteen Young Mexican Writers," *Recent Books in Mexico*. Vol. III, Núm. 3.
- . 1957. "Outstanding Books of the Past Two Years," *Recent Books in Mexico*. Vol. III, Núm. 4.
- Blanco Aguinaga, Carlos. 1955. "Realidad y estilo de Juan Rulfo," *La ficción de la memoria: Juan Rulfo ante la crítica*. (Selección y prólogo de Federico Campbell.) México, D.F.: Ediciones Era y Universidad Nacional Autónoma de México, 2003. pp. 19-43. (初出 *Revista Mexicana de la Literatura*, Vol. I, Núm. 1.)
- Burns, Archibaldo. 1955. "Pedro Páramo o la unción y la gallina," *México en la Cultura*, 15 de mayo.
- Carballo, Emmanuel. 1954. "Arreola y Rulfo, cuentistas," *Universidad de México*. Vol. VIII, Núm. 7, marzo.
- . 1964. "Catorce Novelas: entrevista con John S. Brushwood," *Cultura en México*, 27 de mayo.
- Chumacero, Alí. 1955. "El Pedro Páramo de Juan Rulfo," *Universidad de México*. Vol. IX, Núm. 8, abril.
- de la Cruz, Salvador. 1955. "Pedro Páramo," *Metáfora*, Vol. I, Núm. 2, mayo-junio.
- Elizondo, Carlos. 1955. "Pedro Páramo, novela por Juan Rulfo," *Hoy*, 23 de julio.
- Fuentes, Carlos. 1955. "Pedro Páramo," en *La narrativa de Juan Rulfo: interpretaciones críticas*. (Traducido por J. Sommers) México, D.F.: Secretaría de Educación Pública/Dirección General de Divulgación (SepSetentas), 1974.

- pp. 57-59. (初出 *L'esprit des lettres* (Rhône), noviembre-diciembre)
- Lizalde, Eduardo. 1954. "El escritor intermedio y la sociedad," *México en la Cultura*, 11 de julio.
- Luquín, Eduardo. 1957. "La novelística mexicana y una novela," *Revista Mexicana de Cultura*, 26 de mayo.
- Quiroz Hernández, Alberto (Benjamín América). 1955. "Notas de Benjamin América," en *El libro y el pueblo*. Vol. XVII, Núm. 19, septiembre-octubre.
- Vázquez Amaral, José. 1956. "A Literary Letter from Mexico," *New York Times Book Review*, September 19.
- Xirau, Ramón. 1955. "*Pedro Páramo*. The First Novel of Juan Rufo," *Recent Books in Mexico*. Vol. I, Núm. 4.
- . 1959. "Mexicanism: The Theory and the Reality," *Texas Quarterly*. Vol. II, No. 1, Spring.
- Zendejas, Francisco. 1955a. "Donde los sollozos hablan," *México en la Cultura*, 24 de abril.
- . 1955b. "Carta a los intelectuales de México: deberes de la inteligencia en esta hora y ante los problemas del país," *Revista de América*, 13 de agosto.



〈Resumen〉

## La creación del “escritor nacional” : el ambiente cultural que valora a Juan Rulfo

Fukumi NIHIRA

Este ensayo investiga el proceso que permite ver cómo Juan Rulfo fijó posición con respecto a la opinión del mundo literario mexicano y extranjero, y cuál fue la evolución de sus puntos de vista. Se estima que la obra de Rulfo, en particular su única novela *Pedro Páramo* (1955), expresa “lo mexicano” y en ella realiza una síntesis entre nacionalismo y universalismo, ideologías sobre las cuales los intelectuales mexicanos debatieron desde el siglo XIX. En este sentido, hago referencia a las críticas publicadas en periódicos y revistas en la década de los 50, enfocando particularmente los usos del concepto que define “lo mexicano”.

En primer lugar, los críticos de esa época buscaban la mexicanidad e interpretaron y valoraron *Pedro Páramo* como un buen ejemplo que recoge la voz escondida de los campesinos mexicanos. Al mismo tiempo, las críticas extranjeras, provenientes de los Estados Unidos principalmente, llamaron mucho la atención de los intelectuales mexicanos. Los críticos mexicanos asumieron parcialmente la mirada extranjera y construyeron la definición de “nosotros los mexicanos”. Los críticos extranjeros también entendieron la obra como una expresión del pueblo mexicano, reflejada en

términos duales como "la vida" y "la muerte", y "lo interno" y "lo externo", basándose en *El laberinto de la soledad*, de Octavio Paz. Ambos enfoques críticos, tanto de México como del extranjero, representados por ejemplo, por Ramón Xirau, Carlos Blanco Aguinaga y Carlos Fuentes, necesitan "lo mexicano" para explicar la obra. Este Concepto permitiría contrastar los alcances de la obra de Rulfo para que la misma fuese considerada como una obra universal.

Aparte de las reacciones positivas, se produjo también el antagonismo de algunos intelectuales mexicanos en contra de los Estados Unidos. Esta posición está relacionada con el nacionalismo cultural desde el cual atacaron la condición económica de Rulfo, ya que recibió una beca de una fundación norteamericana. Estos críticos opinaron pues, que *Pedro Páramo* era resultado de la mala influencia norteamericana, y que esto se puede ver en la combinación de técnicas experimentales que se articulan en la obra. Al mismo tiempo consideraban que a un escritor se le valora no solamente a partir de su obra, sino también por los actos de su vida privada.

En ese ambiente intelectual, Rulfo saltó a la fama gracias a dos personas cuya importancia no ha sido considerada lo suficientemente hasta ahora: uno es el crítico Francisco Zendejas, quien defendió a Rulfo mostrando también la vida privada del escritor. Zendejas sugirió que Rulfo no era culpable de la incomprensión que había suscitado sus narraciones, porque él había escrito una obra original y perfecta en lo que respecta a forma y contenido. Esta opinión marcará la apertura del debate en torno a quien fue considerado como un escritor privilegiado. Además fundó el Premio Xavier Villaurrutia en 1955, cuyo ganador inicial fue Rulfo. La otra persona es Juan José Arreola, originario del estado de Jalisco como Rulfo y de la misma generación. Al ser comparado con Arreola, considerado como universalista, Rulfo pudo ponerse en una posición nacionalista y pudo así es-

quitar los ataques de los nacionalistas y ganar su fama como un escritor que describe a “México”.

Así se puede confirmar cómo fue que Rulfo ganó una inusitada relevancia gracias a su obra, que es autóctona y universal al mismo tiempo. La valoración de Rulfo surgió en un punto intermedio que marca la historia de la literatura mexicana hasta ese momento. Este punto intermedio surge del contraste de opiniones que generó el cruce de perspectivas entre nacionalistas y universalistas.